

タブノキ(*Persea thunbergii* kosterm.)の遺伝変異 研究試験地設定

著者	林 重佐, 新屋敷 貞敏, 後野 隆一, 金子 周平
雑誌名	鹿児島大学農学部演習林報告
巻	4
ページ	191-194
URL	http://hdl.handle.net/10232/915

タブノキ (*Persea thunbergii* Kosterm.) の 遺伝変異研究試験地設定

林 重 佐,* 新屋敷 貞 敏**
後 野 隆 一***, 金 子 周 平****

I. 目的

暖帯広葉樹林の主要樹種であるタブノキは建築や家具などの用材として珍重せられるばかりでなく、街路樹や緑化樹の有力候補木であると考えられる。

山野に自生しているタブノキには、幹の通直な木とそうでない木、枝張りの大きな木とそうでない木、新芽の色が鮮紅色を呈する木と黄緑色を呈する木、更には心材の色が赤く美しい木やそうでない木があるなど、さまざまな形質に量的あるいは質的な変異が観察される。

人間の目的に合った森林や街路樹帯などが造成されるためには、植え付けられる樹木がその場所の環境に適応していることは勿論必要な条件であるが、目的がより効果的に達成されるためには、遺伝的により合目的な形質を兼ね備えた木の選抜使用が望まれる。

吾国の主要針葉樹種については、古くから、特に精英樹選抜育種事業が計画実行されてこのかた遺伝育種学的研究が活発におこなわれてきたが、広葉樹については、極く一部を除いていまやっとその緒につこうとしている段階で、特に、タブノキに関するこの方面の研究は皆無である。

筆者らは、かねてから常緑広葉樹の育種に関心をもってきたが、たまたまタブノキの種子豊作年に採種、そしてその育苗に成功したこの機会に、野生状態に放置されたままのこの樹種の遺伝変異が、どの形質にどれくらい内在しているのか、言いかえれば、タブノキの素質はどれくらい遺伝的に改変することが可能であるのか、その目安を得ることを目的にしてこの試験地を設定することにした。

II. 採種

採種は1972年7月中旬から8月上旬にかけて、鹿児島市周辺および鹿児島大学農学部附属高隈演習林内で、着果量の多いことを条件に選ばれた15本の個体から母樹別におこなわれた。採種母樹はお互いに有効な交配がおこなわれないであろうと考えられる距離(約 500m)以上離れていることに考慮が払われた以外には特に形質的な選抜はおこなわれていない。母樹の記号および生育地を表1に示す。

* 鹿児島大学農学部林学科
** 鹿児島大学農学部附属高隈演習林
*** 川内実業高校
**** 福岡県林業試験場

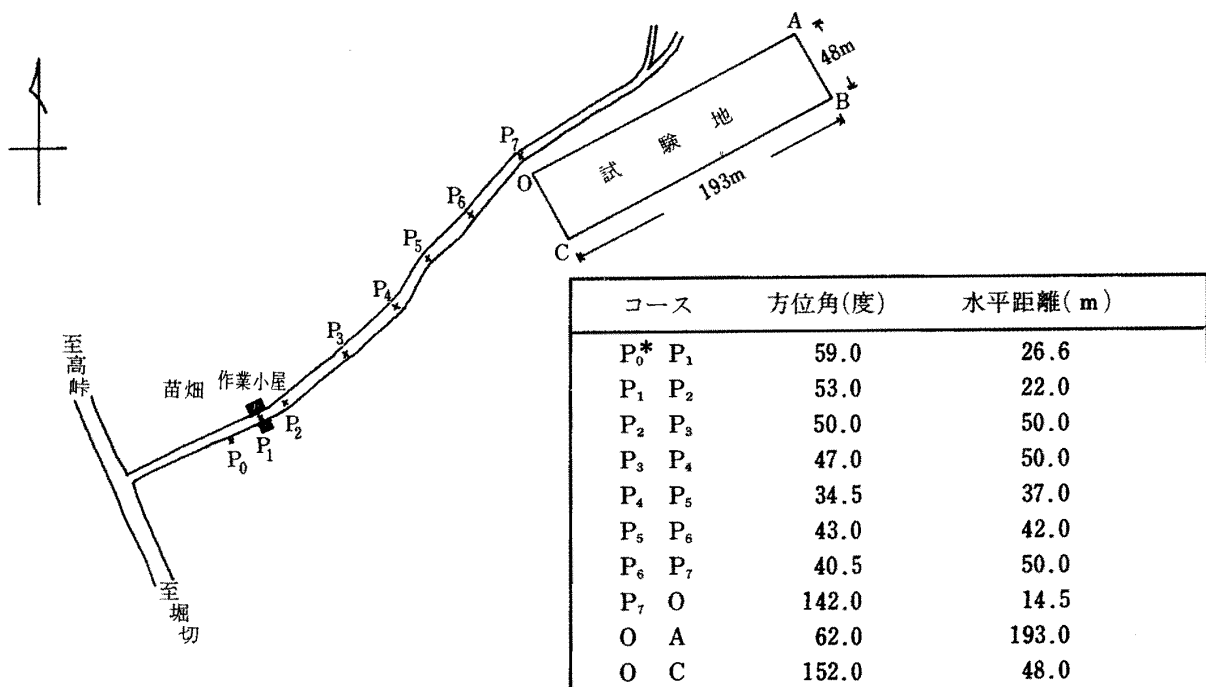
第1表 採種母樹の記号および生育地

母樹記号	生 育 地		
H	広木小学校前	鹿児島市	
D	西郷洞窟前		
Y	吉野公園入口附近		
TE 1	鹿大寺山総合試験場 第1林班		
TE 4	” ” ” 4 ”		
T 1	鹿大高隈演習林	第16林班	垂水市 (大隅半島中部)
T 2	” ”	” 16 ”	
T 3	” ”	” 16 ”	
T 4	” ”	” 12 ”	
T 5 *	” ”	” 5 ”	
T 6	” ”	” 4 ”	
T 7	” ”	” 4 ”	
T 8	” ”	” 5 ”	
T 9	” ”	” 4 ”	
T 10	” ”	” 1 ”	

* ホソバタブ (*Persea japonica* Kosterm.) らしい

III. 試験地の位置、形、大きさおよび植栽方式など

試験地設定場所は鹿児島県大隅半島中部に位置する垂水市の鹿児島大学農学部附属高隈演習林第6林班内である。その位置、形および大きさは図1のとうりである。



第1図 試験地の位置、形および大きさ

* P₀: 境界石柱



ブ ロ ッ ク I

ブ ロ ッ ク II

ブ ロ ッ ク III

H T1 T3 T9 D T2 T6 T8 Y T4 TE1 T10 T5 TE4 T7 T4 T8 T10 TE1 D T5 T6 TE4 H T1 T2 Y T7 T3 T9 T4 Y D T9 T7 TE4 T5 T10



第2回 試験地内植栽木位置図

○ 研究用タブノキ

× 補間植栽タブノキ

△ 周辺植栽ヒノキ

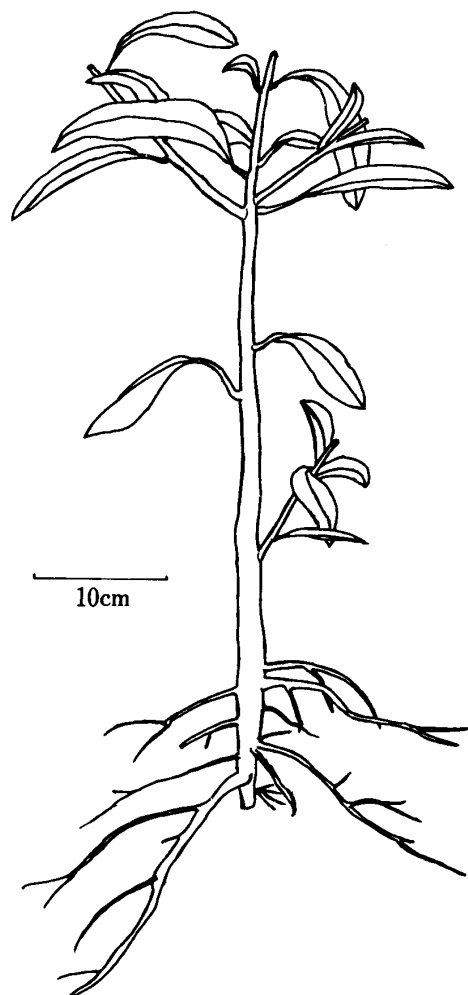
試験地内の植栽方式は第2図に示されている。すなわち

1. 同一母樹は2列植（列間距離2 m）。
2. 植栽間隔2 m。
3. 母樹間間隔3 m。
4. 1列最大23本植（母樹により苗木数に差異があり必ずしも揃っていない）。
5. 1母樹あたり2～3回反復

なお、試験地と他の林分と境界を明確にする目的で、周囲にヒノキが植栽された。

植栽苗木の平均的な形および大きさを第3図に示す。新芽と直根は切除され、枝数は2～3本になるように整枝された。

6. 植栽は1975年5月1日と2日の両日におこなわれた。



第3図 タブノキ苗の平均的な形および大きさ

IV. 今後

分らないことが多いので、今後は植栽木の状況を観察しながら調査研究をおこなう予定であるが、目下の計画は

1. 測定は5年毎に
2. 測定形質は、樹高、胸高直径、枝張、幹の通直性などの他に異常気象および病虫害に対する抵抗性をしらべる。

なお、20年後には心材の色や材質なども調べる予定であるから、この試験地はすくなくとも1995年までは存続されることを期待する。

V. 後記

筆者らの主たる受持ちは次のようであった。

1. 採種および育苗は、当時大学院学生であった後野および金子によっておこなわれた。
2. 植栽は新屋敷の監督のもとに実行された。
3. 林は1および2に立合った。

なお、試験地設定にいたる過程で鹿大農学部林学科森林経理学講座の学生諸君および演習林職員の大いなる協力をいただいたつつしんで謝意を表したい。